

2021年7月25日 聖霊降臨節第10主日礼拝

メッセージ「平和をつくるために」

牛田匡牧師

聖書 マタイによる福音書 9章 9-13節

梅雨が明けて、連日 30 度を超える猛暑が続く中、一昨日から「平和の祭典」と呼ばれる東京オリンピックが始まりました。東京では新型コロナウイルス感染症のための「緊急事態宣言」が出され、隣接する神奈川、埼玉、千葉や、この大阪にも、引き続き「まん延防止等重点措置」が取られているにもかかわらず、開催されました。新型コロナの「第 5 波」が到来したと言われて、全国で新規感染者数が増え続けていますが、感染の増大や、新たな変異株の発生などを心配して開催の中止や、反対する声もたくさんありましたが、結果的には全て無視されています。

新聞社も、オリンピックのスポンサー企業になっていますから、あまり批判は出来ないのでしょうか。テレビを見ると、まるで戦時中の大本営発表かのように、オリンピックを応援する声しか聞こえて来ません。一体、誰のための「平和の祭典」なのでしょう。もともとは、世界を平和にするための手段としてのスポーツ大会として、近代オリンピックは始められたのだと聞いていますが、その目的は、いつの間にか、それぞれの国の国威掲揚のため、また商業主義の経済効果のために取って替わってしまったように思います。

多くの人は、何か困ったこと、危機的な状況になると、「国が国民を助けてくれる」と思っているのではないかと思います。消防にしても救急にしても、そのために私たちは税金を払っていると思っています。しかし、実際はどうでしょうか。歴史を見ると分かる通り、国は国民を守りません。むしろ国を守るために国民が利用され、犠牲にされて来ました。そして今もまたオリンピックの名の下に、多くの人たちが黙らされ、踏みつけにされているのではないのでしょうか。

思い返せば、2013年に東京へのオリンピック招致が決まった際にも、当時の首相であった安倍さんが、福島第一原発の汚染水は「きちんとコントロールされている」「対策には責任を持つ」と堂々と嘘を言っていた所から始まって、今や何が本当の目的なのかも分からなくされ、嘘だらけのオリンピックになってしまっているのではないのでしょうか。「スポーツには人を感動させ、世界を変える力がある」、その通りです。また「日々研鑽を積み、練習に励んで来た選手たちにとっての一生に一度の舞台だ」というのも、その通りです。ですが、それらと強硬開催とを、「どちらか一方を選びなさい」という二者択一の天秤にかけるようなやり方こそが間違っているのではないかと思います。スポーツ本来の、人類の平和に貢献するという本来の目的にまで遡れば、これだけ多くの人々が世界中から関係しているイベントなわけですから、もっと自由に、もっと多様なアイデアが生まれて、感染予防と経済効果も

両立できるような計画も生まれたかもしれません。

そのことを考えると今、世界中から、感染しないように、させないように細心の注意を払いながら、応援してくれる仲間たちもいない中、最高の記録を出すために日本にやって来ている選手たちも、この大会の犠牲者であると言えるのではないかと思います。そしてまたメディアに載せられて競技の観戦に一喜一憂している私たちも、気が付かないまま、その足でさらに弱く小さくされている人たちを踏み付けているのではないのでしょうか。このコロナ禍の中、その被害が大きくなることを祈るばかりです。

さて、今回の聖書のお話は、イエス様がマタイという一人の徴税人を弟子にしたというお話でした。同じお話が書かれている『マルコによる福音書』や『ルカによる福音書』では、その徴税人の名前はマタイではなくレビになっていますが、当時の人々から嫌われていて、いつも「罪人」と並び称されている「徴税人」に、イエス様が直接声をかけたということは、実際にあったことなのだろうと思います。当時のユダヤは、ローマ帝国に支配されていたので、人々はローマへの納税を求められました。しかし、ローマからの役人が村々にやって来て、税金を取り立てたのではなく、実際の集金作業は各地で、現地のユダヤ人に委託して行わせていました。それによって人々の反感は、直接ローマに対しては向かず、徴税人たちに向くように仕向けられました。それがローマの植民地支配のやり方だったわけです。

そのため、徴税人は同じユダヤ人の仲間でありながらも、敵であるローマの手先として、ローマに魂を売り渡した者として周りの人々から軽蔑され、「罪人」と見なされていました。一方で、徴税人たちも、人々から嫌われ、軽蔑される中で、金を頼りにして生き、ローマの権力を盾にして人々から不当に金を巻き上げていたようです。そんな徴税人の一人であったマタイにイエス様は「私に従いなさい(ついておいで)」と声をかけられ、彼は素直に従いました。もっと多くの会話のやり取りがあったかもしれませんが、収税所に座っていたマタイは、そのイエス様の呼びかけに応えて、新しい生き方へと歩み出しました。

その後、みんなで食事をしていると、それを見かけたファリサイ派の人たちが、そこにいた弟子たちに「なぜ、あなたがたの先生は徴税人や罪人と一緒に食事をするのか」と聞きました。なぜなら「そのような罪深い、穢れた人たちと一緒に食事したら、自分たちも穢れてしまう。清さが保てないために、それはしてはいけないことでしょう」というわけです。ですが、この質問が耳に入ったイエス様の回答が秀逸でした。「医者が必要とするのは、丈夫な人ではなく病人である。『私が求めるのは慈しみであって、いけにえではない』とはどういう意味か、行って学びなさい。私

が来たのは、正しい人を招くためではなく、罪人を招くためである」……。

このイエス様の言葉を聞くと、流石と言わざるを得ません。ファリサイ派の人たちは普段は、人々に「律法に従った生き方」「神様から求められている義しい生き方」を教えているとはいえ、やはり本当の神様の思い、真実を見誤っていたのだな、と思います。「人を裁くな。裁かれないためである。あなたがたは、自分の裁く裁きで裁かれ、自分の量る秤で量られる」(マタイ 7:1-2)という言葉がありますが、人々を裁いていたファリサイ派の人たち自身が、同じように裁かれていたわけです。

しかし、このお話はそのようにファリサイ派の人たちを批判して終わりなのでしょうか。確かに福音書は、義しいイエス様と、義しくないファリサイ派・律法学者・ユダヤ人たちという対立的な構図で書かれ、その後のキリスト教の歴史の中でも、ユダヤ教を差別してきた歴史が長くありました。その極地が、いわゆるナチスによる「ユダヤ人大量虐殺(ショア/ホロコースト)」だったわけですが、あれがイエス様の思い、全ての命の創り主である神様の御心なのかということ、決してそうではないということは、誰にでも分かることではないでしょうか。では、このお話が私たちに伝えていることは、一体何なのでしょう。

当時のユダヤ社会には、ファリサイ派の他にも、サドカイ派など、様々なユダヤ教の宗教指導者たちのグループがありました。現代でも仏教にもキリスト教にも沢山の諸宗派、教派がありますが、当時のユダヤ教にも沢山の宗派があり、それぞれに律法の重視している点が異なっていました。エルサレムの都にいたサドカイ派の人たちは神殿にいる職業祭司で、祭壇でいけにえを献げる祭儀を重視していましたが、ファリサイ派の人たちは各地に点在していて、その職業は職人や農夫、商人など、普通の村人であったそうです。彼らはそのように村々での生活を送りながら、それでもローマ帝国の植民地支配下の中で、自分たちのユダヤ人として信仰やアイデンティティを保つために律法に向き合い、貧しい日常生活の中でも、何とか守れそうな安息日や食事規定を中心とする律法の順守を提唱していました。なぜならサドカイ派のように神殿での祭儀を中心にする教えなど、貧しい地方の村人たちには、到底守れるものではなかったからです。「たとえ神殿参りは出来なくても、いけにえは献げられなくても大丈夫。これくらいなら守れるじゃないか。これだけでも守っていれば、神様は私たちを見放したりはしない。ここに渡したちの拠り所があるんだ」……。そう言って人々を励ましていたのではないかと想像します。

しかし、それが、後には特に農村で著しい貧困化・格差が進む中で、律法を守れない人々への抑圧・差別へと繋がって行きました。すなわち神の民としての「清い生活」「儀式的清浄」を重視する考えが、それすら守り切ることの出来ない、更に貧しい人々への蔑視・排除・搾取に使われて行ってしまいました。イエス様がファリ

サイ派の人たちに対して語られたのは、そんな状況の中においてでした。

ファリサイ派の人たちに対して、イエス様は言われました。「神様はこの人たちを招いています。私はこの人たちのために来ました」「『神が求めているのは憐れみであって、いけにえではない』という聖書の言葉の意味を、あなたたちも行って学んで来なさい」……。ここで引用されているのは、ヘブライ語聖書の中の『ホセア書』の言葉です。預言者ホセアは、どれだけ人間が神を裏切ろうとも、神は人間を見捨てることなく、人を大切に続けるということを繰り返し語りました。だからこそ私たち人間も神がそのような方であることを知り、人間同士でも同じようにお互いに大切にしようように生きなさい、それは自分に対していけにえを献げるよりもはるかに嬉しいことだ、ということでした。

ファリサイ派の人たちは、貧しい民衆たちに寄り添い、いけにえを献げられないことで人々を断罪し裁くのではなく、いけにえではなく身の清さを保つことで神によって義とされると人々に伝えましたが、やがてその精神が失われ、形骸化すると身の清さを保つこと自体が、目的となってしまって、いけにえと同じく人々を裁く口実とされてしまいました。だからこそ、イエス様はファリサイ派の人たちを断罪するのではなく、原点に立ち返るように気づきを促すために、「あなたたちが良く知っている『私が求めているのは憐れみであって、いけにえではない』という聖書の言葉の意味を、あなたたちが差別しているこの人たちから教えてもらって来なさい」と言われたのではないのでしょうか。

平和はどこにあるのか……。平和は「ここにある、これをしたら手に入る」というものなのではないのでしょうか。「スポーツをしたら平和になれる」「律法を守ったら平和になれる」……。裏を返せば、それらが出来なければ平和にはならない……。そんな単純なものではないような気がします。「私が求めているのは憐れみであって、いけにえではない」と言われている「憐れみ」という言葉は、上から目線で同情することではなく、人の痛みを分かること、隣りに並んで共感するということです。

平和をつくるために必要なことは、平和が失われている所、平和が奪われている人たちと出会うこと。社会から見向きもされず、踏みつけにされている所に目と手と心を向けることからしか始まらないのではないのでしょうか。そしてそれは、どこか遠くの国にあるだけではなく、意外と身近なところ、職場や家庭の中にも、また他ならぬ自分自身の中にも、確かにあるのではないのでしょうか。目的のための手段が、いつの間にかそれ自身が目的になってしまい、それが出来ない人を裁いてしまうことがあります。私たちはどこから来てどこへ行くのか。神様から日々に命を与えられている私たちは、この命を使って、平和をつくるために、全ての命を大切にしよう歩みへと、今日も導かれて行きます。